

## 英語学習法

### ①文法の基本を固める

正確に英文を読解し、正確な英文を書くためには、英文法の知識が絶対に必要である。大学入試において、文法問題の占める割合はそれほど多くなくても、英文読解と英作文の土台となるものが、英文法である。

高校2年までの履修範囲で大学入試に必要とされる文法項目はすべて網羅されることになるが、英語の授業の中で英文法の学習に向けられる時間の絶対量が不足しているのも現状である。そこで、授業の中で獲得した文法知識を、教科書以外の併用教材で積極的に「トレーニング」し、「使える」知識にして行く必要がある。

### ②単語・熟語のストックを増やす

高校英語が難しいと感じるもう一つの原因は、中学英語に比べ格段に語彙数が増えているということがあげられる。中学時代に行っていた単語の意味さえ分かればそれで用が足りるという辞書の引き方にピリオドを打ち、辞書を引いたら、必ず発音・アクセントを確認し、名詞だったら「意味」の他に、「派生語」や「反意語・同意語」まで調べる。

また、動詞については、例文を参照し用法をしっかりと確認する。例えば、leaveなら、"leave + X + ..."の"X + ..."のところに注意をする。'leave + O' なのか、'leave + O<sub>1</sub> + O<sub>2</sub>' なのか 'leave + O + C' なのか、といったように。

実際に英文を読んでいて出てきた単語を意識して覚えていくのが最も効率的であるが、やはり、市販の単語集も大いに活用し、単語は意識して覚え込むように努力する。また、熟語については、入試に頻出するものを中心に頻度順にコンパクトにまとめた熟語集を活用し、学習してゆくのが効率的である。

### ③普段の授業を最大限に生かす

「分かる所と分からない所をはっきりさせ、どこを重点に聞きたいか」というアグレッシブな姿勢で授業に臨むためには、予習に重点においた英語学習に転換する。

## 予習の仕方

### 【文法編】

1. テキストのコピーをとる。これがノート代わりになる。
2. 何も見ずに問題を解いてみる。わからなかった問題に印をつけておく。
3. サブテキストの解説・辞書・参考書などで、わからない箇所を調べる。
4. 調べることによって新しい答えを導き出せたとしても、先に書いた答えは消さずに残しておく。

### 【英文読解編】

1. テキストのコピーをとる。これがノート代わりになる。
2. 何も調べずに全文を通して最低3回読んでみる。頭でしっかり読みながら、文章の区切りを考えて。
3. どうしても調べたい単語を調べ、もう2、3度読んでみる。
4. 文意が明らかになるまで辞書を引く。

## 授業の受け方

1. 用意していたテキストのコピーをノート代わりに使い自由に書き込む。
2. 板書は重要なことが多いので必ず書き取る。
3. 特に予習で解決できなかったところを注意して聞く。
4. 予習の段階で間違えた答えは残しておく。
5. 特に、英文読解では訳を書き取ろうなどと思っ**てはいけない**。「読み方」と「内容把握」に重点を置くこと。

## 復習の仕方

基本的に授業当日に行う。

1. (書き込みのない) テキストを使ってもう一度問題を解く。英文読解であれば2、3度声を出さずに精読し、テーマと内容をきちんと理解する。
2. わからないところを中心に、授業でとったノート・辞書などを使って確認。
3. 英文読解の場合、英文をひたすら音読する(最低10回がめど)。最初は単語の意味や文の構造を考えながら読んでいく。最終的には頭から英語を英語のまま理解できるようになるまで読む。
4. 暗記事項は覚え込む。(ただし、長期にわたって何度も反復すること。1回では覚えられないし、その必要もない)。読解の場合は一度読んだ長文を、期間をあけて読んでみるとなおよい。テキスト中の重要単語・熟語にマーカーをしておく(ただし意味などは絶対に書き込んではいけない)。そうすることで、単語集代わりに使いこなすこともできる。

## 国語学習法

大学入試に求められる力は、「読解力」と「記述力」である。文章を正確に読むことと、設問の要求に応じて解答を作ることは短期間にできることではない。「読む」「書く」という訓練を繰り返すことで、入試問題に対応する力がつく。

### 国語の世界を広げる

広く多くの分野の文章にふれていくことが大事である。教科書の文章だけでなく、読書することで読解力もつき、語彙量も増える。また、古典は私たちに生き方の指針を与えてくれるものである。今を生きることにつながる学習である。文章理解に不可欠な文法事項と当時の人々の考え方をつかんでいこう。

### 授業を最大限に活用する

#### 【現代文】

現代文において実践してほしいことは、論理的に文章を読むことを常に意識して学習に取りかかることである。文章中に出てきたわからない語句を調べること、読解した文章の要約を書いてノートにまとめることなどが正確な読解力養成には効果的である。

#### 【古文】

文法は早いうちに仕上げるのが大切である。用言の活用や助動詞の意味・接続などは繰り返し何度もチェックすることにより自然に覚えるようにする。基本古語についても、本文や例文の解釈とからめながら、着実に覚える。

#### 【漢文】

漢文の解釈力をつけるためには句形をきちんと覚えて、解釈に取り入れることが大切である。否定、疑問・反語、使役、受身など重要句形から始め、なるべく多くの句形を覚える。句形は例文を使って学習するようにすれば、習得しやすくなる。また、学校で配布される「国語便覧」を有効活用することで、必要な知識をビジュアル的に整理できる。

### ★「予習」のポイントは次の3点

#### ◇ point1 ◇ 「わからないこと」をはっきりさせるのが「予習」！

- ①時間を設定して(たとえば25分)、テキストの問題を自力で解いてみよう。入試本番では時間との闘いになるので、時間を意識することが必要だ。
- ②「この問題は自信がある」という設問には、OKマーク(たとえば「○」)、「これは授業できちんと聞かねば」という設問に「！」(など)をつけよう。これらがないと、授業も復習も大変になる。
- ③その上で、調べられること・調べて解決できそうなことは調べておく。

#### ◇ point2 ◇ 「テキスト」には直接答を書き込まない！

できれば、本文はコピーをとるなどして、それに答および道すじを書き込もう。テキストに書き込んでよいのは、OKマークのみ。答を書き込んでしまうと、復習に使えなくなるので、気をつけよう。

#### ◇ point3 ◇ 「古典(古文・漢文)」は「音読」してこよう！

五感をフルに活用するのがポイント。

### ★「授業」は必ず予習をしてきて、メリハリをつけて受けよう

#### ◇ point ◇ 「答」は消さない・塗りつぶさない・書き直さない！

- ①自分の答と正解との違いを確認できるように、自分の書いた答は大切に残しておこう。消したり、塗りつぶしたりしては、同じ過ちを繰り返すことになる。
- ②「予習」ではっきりさせた「わからないこと」を解決するのが授業である。授業で解決しなかった場合は、質問に行き解決(納得)しよう。
- ③「OKマーク」で正解だったら、「◎」「☆」にする。

### ★「復習」までのサイクルを早めにつくってしまおう

#### ◇ point ◇ 「◎」や「☆」のない問題についてたどり直そう！

- ①答えの根拠を確認して、選び直す。必要条件をおさえて、答えをまとめ直す。
- ②現代文は、本文を要約してみよう。古文・漢文は、本文を音読しておこう。

### ★「語彙」がなくってははじまらない

#### ◇ point1 ◇ 辞典を引こう！

入試国語に欠かせないものは、「フィーリング」でも「センス」でもない。それらは、得点の上昇・安定にはかえって邪魔になる。それらに頼っているうちは、国語の得点アップは望めない。まず必要なものは、「語彙」である。「顕在」「可視」「表層」などの語句がわからないと正しい読解をするのは難しい。予習の段階では、わからない言葉をチェックし、復習の段階で、辞書を引く。読む。それを続けていくと、次第に、正しい文章読解力に必要なものが何かはわかってくる。

#### ◇ point2 ◇ 古文・漢文の基本は何度も繰り返して覚えよう

古典で覚えるべきものは、古文では「古今異義語」「文法」、漢文では「句法」「漢文重要語句」である。

何度も繰り返して学習し、早めに習得していこう。最初はたいへんでも、くり返していくうちに覚えるスピードもアップするし、定着も楽になる。

語句と文法とを覚えた上で、設問にあわせて知識をとり出す練習をすると、問題を解決する力が向上し、得点も伸びてくる。

### ★まとめ

#### ◇ point ◇ 言葉・日本語の仕組み・論理展開の基本を頭に入れておこう！

- ☆ 言葉を選んで文章は書かれている。
- ☆ 言葉は繰り返しを嫌う。→しかし繰り返しているところは逆に注意すべきところである。
- ☆ 論の進め方で注目したいのは、「キーワードの繰り返し」と「対比」である。
- ☆ 「設問」読解のスタートは「傍線部」分析から始めよう。

## 数学学習法

### ○ 数学の学習は、「予習＋授業＋手を動かした復習」が鉄則！

学習の軸はあくまでも「授業」である。参考書や問題集は授業の補足として考えよう。どんなにいい参考書よりも、授業は大切だ。

#### ① 「予習」は「授業」の理解をより一層深める

- ・予習は最低でも教科書の公式や定理、そこで扱う問題などに目を通すこと。そして鉛筆を持ち自分なりの解き方でよいから1題20分程度考え、ノートなどに書いて残すことが大切。この時点で問題がすらすら説ける必要はなく、疑問点を洗い出すつもりでやろう。

#### ② 「授業」で「予習の疑問を解決・理解」 「ノートをとる」ことに終始しない

- ・授業ではその問題の考え方やアプローチの仕方、公式・定理の使い方などを理解し、どのような考え方で結論に達するのかを知ること集中しよう。
- ・先生の説明の理解を優先し、ノートをとることに集中しすぎない。ノートはあくまでも復習の補助であり、成績の伸びる生徒は、板書以外の先生が口頭で話した内容をメモしている。
- ・予習で作った自分の解答や方針が授業の内容と違った場合、それを質問してみるのも大切なこと。なぜ自分の考え方ではマズイのかを洗い出すいい機会である。

#### ③ 「復習」は知識の定着の場

- ・どんな人でも記憶は時間が経つと薄れるもの。復習は必ず授業の内容が鮮明なその日のうちに行うこと。また復習は1回だけでなく、休日などを利用し2回目・3回目を行うようにする。
- ・復習は、単なる「授業ノートの読み返し」ではない。このような復習では、計算力も

身に付かない。最終的に自力で解答が作れるようにならなければ意味がないということを感じよう。疑問が生じたら日を置かず先生に質問し、解決する。

#### ④ 大学入試を意識した勉強をしよう

- ・教科書で扱われる問題と入試問題の間にはギャップがある。授業で習った単元からでよいので、問題演習を始めよう。
- ・問題集は問題数が多いだけのものは避け、薄くても解答、解法の詳しいものを使おう。（決めかねるときは先生に相談してみるのもよい。）またそれを2回、3回繰り返して使おう。
- ・解けない問題を難しいと言ってチャレンジしないのはもったいない。自分の知らない新しい知識・考え方を提供してくれる飛躍のチャンスと前向きにとらえ、挑戦しよう。
- ・定期テストで出される問題は、入試の基礎であることが多い。一夜漬けの学習で乗り切るのはではなく、普段からの学習で身につけよう。
- ・休日などを利用し、不得意分野は早めに対策を。なんとなく得意分野に逃げがちだが、十分な時間をかけ演習量を確保しよう。
- ・模擬試験を有効に活用しよう。確実な復習を行いつつ、ファイルに綴じておき長期休暇などで再度解き直してることが大切。

#### ⑤ 数学は積み重ねが大切な教科だけに時間がかかる

- ・「数学が苦手だ」という人は2通りのタイプがある。一つはその単元そのものが苦手だという人と、もう一つはそれ以前の単元がわからず放置してきたがために今習っているところもわからないという人であり、圧倒的に後者の人が多い。数学がわからなくなったのはいつなのかを考えて、その時点からしっかり復習してみる事が大切だ。中学の時に苦手だった人も時間が経った今では中学の数学はとても易しく感じられるはずだ。
- ・数学は厳密な科目だからといって、完璧主義な答案を作ろうとする人が多い。でもこれは挫折のもと。もっと気楽に継続できる学習をしよう。

## 理科学習法

### □ 学習コンセプト

「基礎」にこだわりすぎて、教科書の章末問題や演習問題集の基礎確認レベル程度の問題ばかりやっても絶対に力がついてこない。基礎事項を確認できたら、どんどん応用問題（ただし良問）にチャレンジしよう！

問題がいろいろなことを、気づかせ、教えてくれる。また当然のことではあるが、難関大学で出題される問題文のボリュームからみても、それを速く、正確に読み込む日本語読解力の重要性は言うまでもない。

### ◇ 物理 ◇

化学・生物と比べると確かに覚えなければいけないことは少ないのだが、それを覚えたからといって、即得点に結びつく科目ではない。頼りになる「公式」も、それをじっくり考え、理解し、実際に使いこなしてこそ、はじめて得点への原動力となる。

ただ難しい問題をやればいいのかではなく、“良問”と呼ばれる問題をじっくり考え、解くことによって本物の力がついていく。

### ◇ 化学 ◇

「物体」を学ぶ物理とはちがい、「物質」を学ぶ化学の場合、電子配置・化学結合など物質の内部を、また気体の圧力・温度・体積などをイメージできる「ミクロの視点」をもつことがまずは大切なこと。

化学3分野（理論・無機・有機）の中で何と言っても化学上達の鍵をにぎっているのは「理論」であり、理論計算問題の克服こそが、化学攻略の最大のポイントである。この計算問題の本質をみても、決してベクトルや微積といった数学的なものではなく、その殆どが比例式による解法という、いわゆる算数的（四則演算）なものである。そして問題解法のために重要となってくるのが、「単位」の認識である。密度（g/cm）・モル濃度（mol/l）・生成熱（KJ/mol）・ファラデー定数（C/mol）等、問題文に記述されている用語の定義（意味）を確実に理解していない限り問題を解くことはできない。

### ◇ 生物 ◇

物理・化学と比較すると圧倒的に暗記量の多い科目（計算問題はほとんど遺伝分野からだけ）であるため、各項目を有機的・体系的に結びつけて整理しながら効率よく覚えていく必要がある。

生物の場合、出題される問題の全てが、必ずしも高校の教科書からの出題とは限らず、教科書以外からの出題（難問が多い）が増えているため、志望校の過去3年分の問題をチェックし頻度や配点を調べるなど出題傾向を把握し、類題（標準～やや難）を多く解き、応用力・考察力・論述力をつけることが大切である。

## 地理歴史・公民学習法

### ★ 地理歴史・公民を学習するにあたって

特に地理歴史については範囲が膨大なので、なるべく授業で覚えるようにしたい。そのためにも予習段階で基本用語や時代・地図などは確認しておく必要がある。授業で大量に配られるプリントの穴埋めも、単に作業にしてしまっただけでは意味がない。

実際の共通テストおよびセンター試験の問題を過去何年分か解いてみると分かるが、**出る用語等はかなり限られている**。二次試験で地理歴史・公民を使うという人はそう多くないはず、センター試験に特化した問題集や用語集などで重要語句をチェックし、共通テスト・センター試験頻出の用語や項目は必ず覚えること。

一方、二次や私大受験でも使うという場合、**大学によって出題形式が大きく異なる**。早めに過去問にあたり、どういった対策を取ったらよいか、検討しておこう。先生と相談してアドバイスをもらうのが良い。

### ★ ひとつおりの勉強が進んでいくと

単元ごとには理解できていたはずなのに、**模試では間違ってしまう**ということが多くある。それは用語や項目が多いので、勉強が進むうちに混同してしまうからだ。こういった問題は、教科書を順に何度も読み返しても、対策にはならない。資料集の比較表などを活用して覚えるようにしよう。

実際の試験問題では、**時代・分野・地域など幅広く出題**されている。ヤマはかけられない。苦手な時代や分野、項目を勉強し残さないようにしよう。また地理歴史・公民とも時代・分野が複数にまたがるような出題が増えてきている。

例えば、世界史では諸地域の接触と交流、周辺史。日本史では文化史が絡むような問題。地理では地域比較など、教科書の項目を習得した上で、問題演習を十分にこなして、対応出来るようにしなければなかなか点数がとれるようにならない。

また、地図や統計、図表の読みとり問題は、地理歴史・公民ともに最近よく問われている。とかく暗記科目と言われる地歴公民ではあるが、暗記型から、**資料をよみとる能力、さらには思考力を**要求される傾向にある。となれば問題文や資料にヒントが含まれている可能性も高い。あきらめずに問題をよく読み、よく考えよう。公民は日頃からニュースや新聞に目を通しておくと考えられるヒントになるだろう。

最後に・・・地歴公民の勉強は「あとまわし」にしてしまう人が多い。しかし実際は、後でまとめてできるほど楽な科目ではない。それは教科書の厚さを見てもわかるはず。だからこそ、わずかな時間でも、授業の予習復習をしておくことが将来の受験勉強の助けにもなる。